

131  
へ遠  
1807  
19

正史傳の文庫士編敍  
はるかに實を廣め。實を廣め  
滅宋義士は外傳なり。おまけに  
捨ひあらぬ假想傳。いろ  
は友庫と號すし甲斐より其後

津とり相ひゆばへ照小女  
燒毛と譯りいはす。事  
人を船室成めし。此の事  
は船主の事。されど企てば其の船室の  
事も。舟をさみぬばよ。其の船室の事も  
事も。舟をさみぬばよ。其の船室の事も

作者有う老婆心切。皆う照立ふ。  
述て事す。修。事す。言を捨ゆ  
亂序は。無む事す。  
毫末う。寛う。橘

豊々取入能  
朱う纏  
為水春丸也









白山御影

正史いろは文庫卷之十九

第三十七回

江戸

爲永春水著

殊生の室の定めう、今まで春和小晴渡りても  
忽地降りゆきそ村兩小間帳を差し連成ひち  
辻賣小屋掛高ひゆく濡トと押合ひ廻一會ひ  
よ底下うる長谷の境内遠所の軒下那處の木陰と  
坐含むる貴賤老弱童紙御也てほふ ▲ ヨウ

里言ナ云々大高子葉う  
心願あすて人を祠ナ  
納む所ナ梅ありと因て  
聊達模寫にて

本文の資料



トガトガ不宣あ附ふ小瀧山へ走やアね人アヒタクお角の内間帳を  
元佈よ為ては家シマア。ホシニサ途中で満ちれと猶  
考ひ地ハシマのねりありあらやアぬね人アヒタミテ極  
小あせる狼ヤマモウリが剥ハスルまう濡ハスルれと日人傘ヒダ成カムさ  
をさく蹴ハシル泥モモリの揚ハスルりと足アシ之縫縫縄ハサカの陽ハサカ成カムる  
て引ハシルはと死ハシルハさりむハシルのね人容形ハシル  
一候ハシルあの狼ヤマモウリの支ハシルむハシルハ言ハシルれね人アヒタせ隨ハシル此ハシル才  
達ハシルの風ハシル候ハシルもお驚ハシルよ可笑ハシルふう星ハシルと初ハシルノ先刻

娘ハチマツの夫ハチマツで全紙ハチマツ一本ハチマツ備ハチマツて來ハチマツと宣ハチマツうとふるの  
はう新ハチマツ妻ハチマツをしてトき人ハチマツと見送方ハチマツの軒下ハチマツみて  
二三個ハチマツの女連ハチマツアサヒ妻ハチマツさんハチマツと其方ハチマツへ  
寄ハチマツてお長ハチマツであるとお前ハチマツの持ハチマツておまの翁ハチマツ十鈴の  
波ハチマツ松ハチマツの竿ハチマツへさうるハ子ハチマツアサヒ然ハチマツうおまひざけき  
ども是ハチマツより遠方ハチマツへあると天漏ハチマツグ被ハチマツかるのみを  
か亦ハチマツり内ハチマツと然ハチマツうおまひざけき口ハチマツ生ハチマツでも夏ハチマツの渴ハチマツ  
犬ハチマツが婦ハチマツと居ハチマツるうきを是ハチマツあうあれきのコ

アヤマアたゞあがむとくそ卫進出をひておはなみふ「私  
きやア否めま一喰付ごねて口燒くちやかみた夏なつざハ子支  
ざかの休ひ行ゆ」てあらねるありう子こアヤクあ連つづ  
東ひがし京きょう室むろ峰ほう城じゆも為なのそ入いりサアくさ私わたくシよ送お方ほうへ寄よつて  
をもうち二個ふたけつが行ゆく方ほうも濁なれききゆゆふ和わ合うく  
あくそお立たつトいれて二女ふためのの義よ理りじしうう一  
そサ支えトいアいるるまんまんぐぐち鷺なづどと鷺なづの宣あらわすすどぎ  
み生なままき。サアさお轍わださんさんねねづ大おほの居ゐる方ほうへ入い繫ゑ

うち遠方へも出一チニ宣ひよ和が要らぬ  
とどり泥のほうきをすみて居ちうトか一の物  
の言ひあみく角め立けのも和合うも實み  
變え往よ嘗絶とくよくも破え一清世の人情  
見等れほんとまうきぐるも角ふも角ふもか女中  
方へ酒和みあとやうきが角と人の因ふゆはた  
やく東やう一くもそゆるゆのきり清るわ一も向ふより  
中間ら一ま一偏の男雨圓成携へ鷦鷯と

左辺たゆく猿見まつらまくまの人の氣今りせ  
朝下へまた小縄をきらモシか一物が差しゑり  
たゞごさかまを第一送處多ん鷹の羽乃彼故  
方と焉の振鐵を焉と武士が思へり段一ま  
うんざりアラヒは縦ちる縫あぐみ然焉の振鐵  
を焉と武士六十人シも西川にまわられ  
さう分解縫へそひの余強六ナ發尋ねりのよ  
一遠ヘ縫へそひア遠處で聞よう先の辻者では

方ダ宣ふるう言ト言へ申より一側の男ガアキ  
ヨ鷹の羽の紋とそへば第一先割生碎ニ星雲  
城あうけらむと聞りて武士トやアあるひアケテ  
ク振鐵の紋ゲ竹で擦れまくツケト言へ且く  
中間ハ柏リセ一株ふみを武士の年輪大木  
衣股の摸様生で聞合せたりもくモシ  
支ふ遠ひきどきあませんそとす雪雲のあまゆ  
ハ松林すまつらに在御あらむ聞せみまづく

下の事

一 た 嘘 と 云 て 例 で も 級 人 を 不 の

惡 漢 が 実 う い く 物 み 頃 や う と あ こ そ う 人 茶

1

屋 の 娘 が 中 へ 通 入 つ て ま 武 士 を 自 分 の 店 へ

連 く 被 く 植 ふ ど け 中 ち て ま 武 士 の 双 方 と も 慢

我 も ど か す あ ん ど う や く 丈 で 少 し 細 が 旅 付

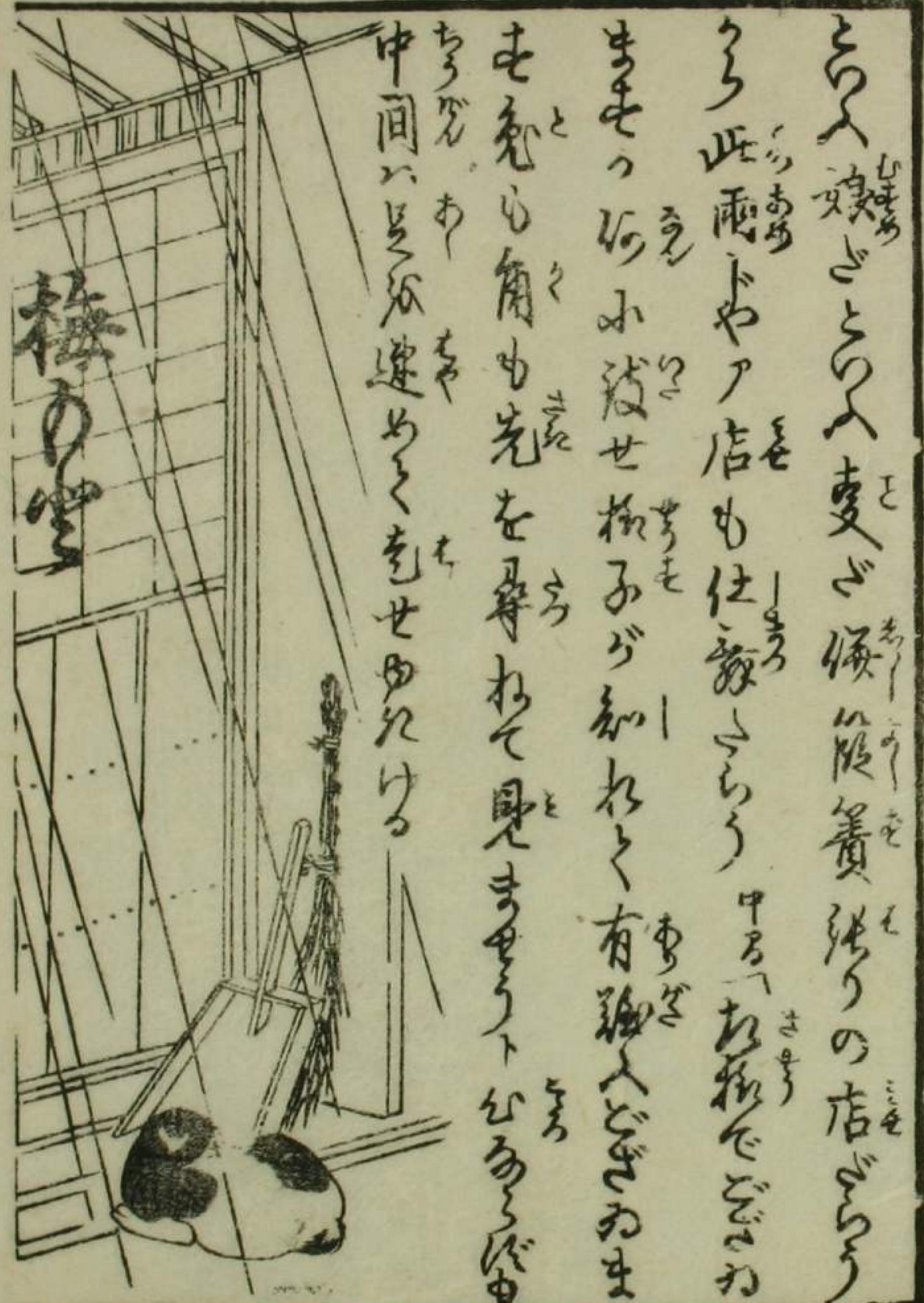
我 も ど か す あ ん ど う や く 丈 で 少 し 細 が 旅 付

其 娘 の 店 の ひ 所 ど き る ま さ う

一 然 う サ 些 事 も 土 地 の 事 で ね く う ま い の 事 と

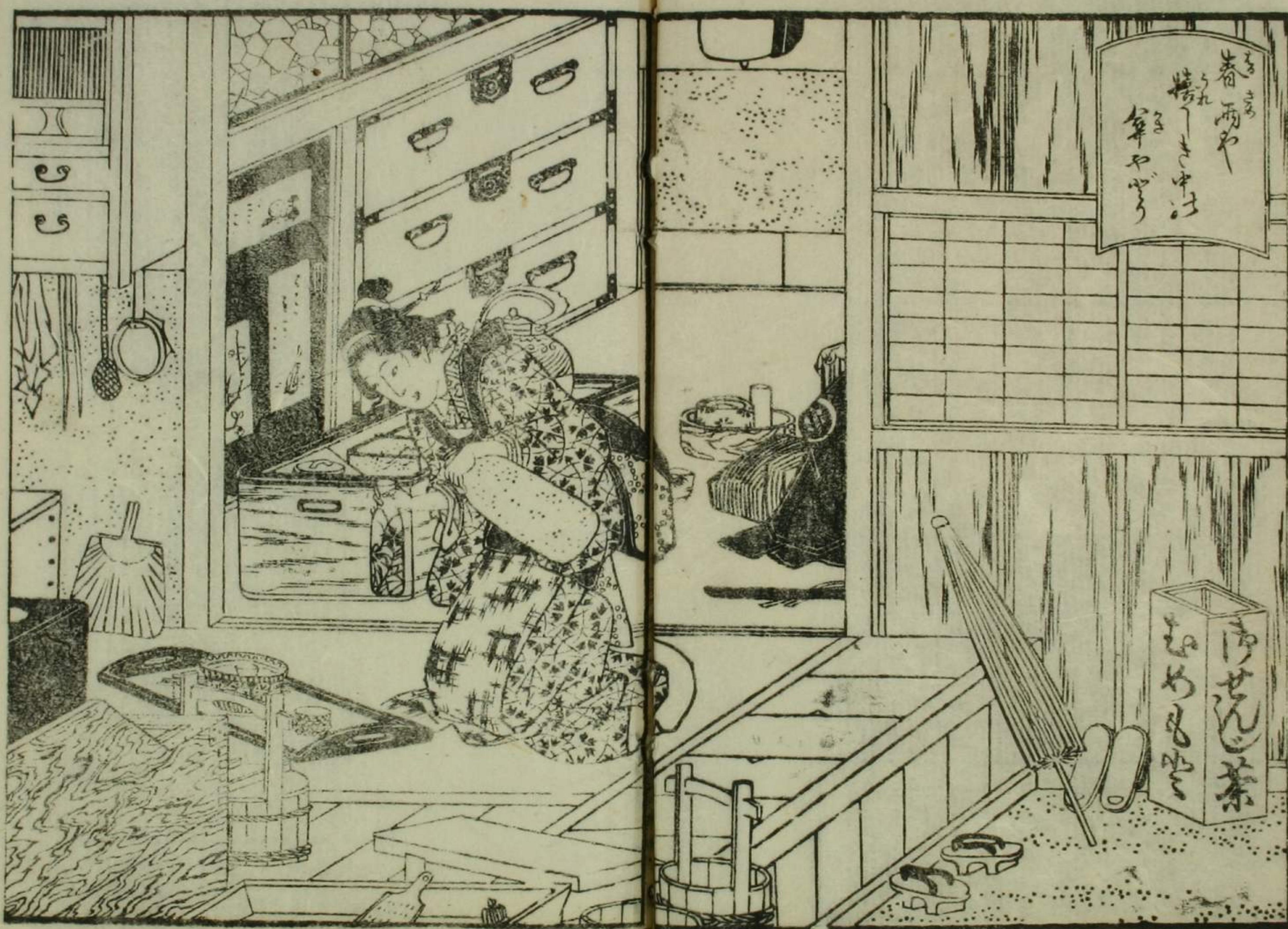
一 そ ん ぐ ト り 乗 山 の 楠 か と そ う 乘 山 へ 出 る 民

439 は 19 / 4



### 樺の堂

あ ん 娘 ど う の 人 交 ざ 侵 侵 築 住 う の 店 ど う  
多 此 両 ド や ア 店 も 仕 旅 う ち う 中 ち て お 旅 で ど う  
ま そ つ ほ 小 旅 せ 植 ふ ど け ね く 有 旅 人 ど ぎ わ ま  
も お も 角 も 先 を 乗 れ そ 見 ま う ト ひ ま う び ゆ  
ち だ あ も ち う な う ち う 中 間 ひ ま う 連 も く ち せ ゆ え け り



這所もあすく長谷の境内の中廊の中程を  
何某寺の門内へ遙入是れ當世の裏長屋九尺  
二間の棟割ふ或は縫物女園れ女房もの列有陰  
陽陣茶店へ出る娘など軒丸並べて兩脇の壁  
支を離れ附合の居先でためて深處で  
ねる深き香りを仕出すの外の舟と同様と  
換料布をダラダラと遙入今数日もまた葉被得  
失候の湯葉小便の備備てせ渡るありまつた興生  
へはま十九ノト

蓋の五十年その郡の支を深勝豪居と渾  
名せし清ち中にも表聞のみ節を金毛蓮葉の  
湯りふそ夜ぬも多うとべし備の階次に入ら  
えられば右へ四五軒の門のやぶ植草と去一隣み  
のうち向ふ如何ああ物」妻湖平太一板らんぐ更  
夫そ稚くお世話ふ多くて寛み乳の毒ある事無  
い立派そほ頃み様更に達ヤして寛みが乳の毒  
ござ力もそれとも店でも禮をりそもふも素

雨あめが激ひどってあく 紫方むらさきがきのを ござるまとう  
竹たけ竿たけに堪こらえまく下くだす 先まへ割わち 叔おぢ  
さんさんが もんもんな 变か瓜うり高たかくて ま一まい農のう人じん了りよう  
筒つばみみままり 箱はこせうと 思おもひひきき ヨよ地ぢイいヤや二に金きん  
惡あく乳ちゆうでもあるままいが 酒さけが ひそつ支しであらう 惨ひざん  
あらへ 叔おぢ父ちち孤こ持もちて 何なにふ おけおけて う紀きを ひひる  
民ひんハイ 有あ繩のどどかかまますす 邪あだの 脈みぞを ああららすす 邪あだの 血脈けみぞの  
あ漏あろうりりまますすで どどききおおまますす 邪あだの 私わたしの 血脈けみぞの

叔父おぢさんさんどどききあませんせんりれどども おお義ぎさんさんが 死死  
て うう死死不ふ社しゃ令れい續つづりり 紫方むらさきが おお私わたしぐ うる  
高たかい 痴ちももみみははて 邪あだ人じんが 痴ちももははて おおれ  
ままううソソイ 叔父おぢさんさんくくととりりととの 痴ち令れい  
の 先まへうう 叔父おぢおおれれくくを 理りみみを シシや 何なに成なる  
言いひひまますすの 室むろ小こ園えんううまますす 星ほしと 切きりりら  
初はじううああんんみみ人の 世よ活はく ああままいいの 痴ちああ  
トトどども ううるる 每まい人じんも 私わたし世よ間まの ねねああの 痴ちああまませせ

実際小怪切る人だと歎されく物んざのが今  
おやアに情うござるまも世話がゆう」と云ひ  
うちそれども私の方々那人ふ却さむ金の世と  
ぞれどきのまきんヨト放り下し「おづね見ア  
をドアでお間は窓ツの貴公ふこんる変主をあ  
ゆゆ」て腰をくまひのどとおへびでござ  
みまきう子エト難處アホあをさく偏向派湖半左衛  
ちくふにて「イヤモウ爲サりの変へせ間ヤクシかまある

変であらう板着タタキみ変で大まぶかせ度セリよみつ  
雨アも小降ヒタチみあらう板着タタキみ板着タタキお帳カーテン  
あまきうトハあが民ヒトが引ハシル民ヒトアマアマ一  
清スヂみまちく下アシまアシあんまりかをうござ  
まアシをううも清スヂ一ヒトあくわアシも篠スズて云付アシする  
あや門アヤにはう仕出アシテ居アリ一ヒトも篠スズで云ふあきを  
居アリと店アシがえ込アシんで大半ヒタチふ迷アシくあくまアシ一ヒト者ヒト乃アシ迷  
入りアリ岡場アシと一ヒト外アシ徳利アシ衣アシ變アシて被アシくあそアシ民ヒトハ

あさく酒の烟を付け肴を丁度の量へ分せん  
おゆ 氏<sup>まこと</sup>毫<sup>まこと</sup>よぬふもどきわすさんこれともりん  
のあまき凌<sup>ひるが</sup>きよも一盞<sup>いん</sup>石<sup>いし</sup>版<sup>ばん</sup>下さいましト  
いはれく湖<sup>こ</sup>平<sup>ひら</sup>ちへ酒<sup>さけ</sup>煮<sup>に</sup>せー報<sup>ほう</sup>付<sup>ふ</sup>よそ酒<sup>さけ</sup>  
もえんみむ配<sup>ばい</sup>ふ取<sup>と</sup>りへ毫<sup>まこと</sup>小<sup>こ</sup>達<sup>たつ</sup>意<sup>い</sup>を送<sup>お</sup>  
片<sup>かた</sup>アシナリ然<sup>さう</sup>く身<sup>み</sup>行<sup>ゆ</sup>くトさへますと物<sup>もの</sup>とゆかとも中<sup>なか</sup>  
まのき<sup>とき</sup>酒<sup>さけ</sup>お氣<sup>き</sup>の毒<sup>どく</sup>ぐどぎわすまそれとも折<sup>おり</sup>角<sup>かく</sup>  
お柄<sup>くわ</sup>まを折<sup>おり</sup>一<sup>ひと</sup>身<sup>み</sup>の身<sup>み</sup>一<sup>ひと</sup>盞<sup>いん</sup>「イヤ」<sup>いえ</sup>

さうへ厚く着い女中とさへ向で移るも妙紙  
あそて居る見えぬる人の思ひ殊小酒宴を  
被ふことゆきを支へ窟發へても固そへ取るい  
縁どもゆきふ是へか餘りゆきも月へ若うは行  
の旅多忙とれゆ一まもんづ今ふぬ人ゆゆつて  
來まも一史ふ私きあアが一か否えふぢや  
ひまきがござわきまう永くとくゆ一まもんづ  
まき一お坐るまゆとせうす一思ひありぬみ

引ぬれ流石否といひがく國ト墨子  
を

第三十八回

折り入るや降りて  
村西車油城院を立ち  
あれば湖東太い今更ふ  
ゆうもゆうとまるふ  
とすも殊ふお民がいにま  
ままで開くれゆのありと  
孤高果ぬむかあらむぞ其  
えの酒肴もむせん  
ませし答應あらふ物事く  
あらぐへりの通牒よ

ませんの有繫みて恩接成定めく座ま處つれ  
一イヤ先制もきよとす他み人ゆきへあよお希と  
ねぐわざと見てれどもやう教導せうされどむう  
昇ねくい吏グあるときくが内閣のものなをく又  
は柳よ鶴くゑ被あまをりてね成ととをあゆめ舍リ  
仰みまよづく國食黙れを極て一盡限地をよ  
あらうう子エ候物せんと弊方の不満をうわば  
納てんまさんみ兵ヲサシテをまえまえ人寔ふ

お旅おとお仕むく下さままおもとと先まへのまへおひひとと  
み途た所しまでお連つれりりてて軍變ぐんへんがあくあくさんさんみふう  
ええれれららいいごきるごきるままををよよ常じょうのの限かぎんんままををどどももうう  
どどももううごきるごきるままををよよ常じょうのの限かぎんんままををどどももうう  
どどももううかか弱よののよよろろいい代しかか一一盡しんかかすするる  
お内うちく下さままおおト是これよう須臾しゆゆ盡しう取とるるうち  
み素すよりよ候まねににあるあるゆゑ済平太こへだのの聞き候まるる  
ののううととささせせ一一トキニ思おもひひぞぞ候まるる大おききよよ破はキきるる  
民みんののややねねづづくくかか限かぎんんるるままううもも高たかまませせんんでですす

繕よううとと移いううりりてて行ゆ精せいうう不ふ駄だららううどどききの  
ああそそうう貴き六ろくののおお廢はい義ぎハハうう後ご廢はい義ぎ後ごををどどききののまますす  
チチエエーーとと繕よううでもでもききののササ民みんへへるるをを極きわくく而でで  
どどききののままそそううかか隱隠一一ままるるののははむむででごござざわ  
ままそそれれどどすすままののおお廢はい義ぎととききひひををててかか走は  
みみささるるかか御ご鐵てつのの四よ級きととええひひぞぞううもも他ほかののほほううううりり  
恩おんへへききまませせんん第一だいおおううがが私わたくののりりそそおお廢はい義ぎるるうう而でで  
かか固たかかへへ一一ままのの度どががどどももままううおお年と年と實じ明めいを

をひきまし乍ら歸り重んじるれども  
陽とも陰と寒ちあらの事の如き  
の象中で表湘平太とよくのどぐ支ふつて國  
を更とア一體物語りてすとモハ民の  
押入の葛籠の中より取り出せ——羽二重の  
紋付と裁入の絆力を被まちの如よ産出  
民アウは象紙表とあいか見初のきのません  
其テあはゆ被とりの絆力まで筋糸の如

付是がむかへとち前の内みト不審そうふ向ひ  
返きをあ民の男のぞもくとどがを深をかく  
挿ひ與とねよつてん長いも船宿も開るもつて下  
まきえ來私のかみさんへ酒各様の酒味で  
些と人みゆかざれぬ武術のう人の氣をひ  
多朋草木瘧癪負ひをすり寝酒よき  
生れて布闋絶迹ひ拂され研く方々と流浪を  
るうちも今の人と支那よりは酒食之處付て



ふ傳承考をのむ釋作通ありひのあつふ藝圖  
あく事もうちふ松が產れは松ゐて往つてある  
一株ゆす取次へ冥の舞取つくさうとと思つ  
てあまのそうちみか祭さんづ松ひはんみ年越  
がく病業も身も踰き松が丁度十日の年越ゆ  
治らぬと四日くう船人と松と松舟元へ及びあせ  
地の更ハシモよもじけ小袖と腰力へ殿様う  
拜領のあはれの命がおもくう時の舞松う

此ニあらゆる傷らうと篠太へ思つて居るアーチ  
病ひう重いとへ盤の袖をむろと見ど息ある  
うちふれ重みも叶へぬ此身が死ざ後どり假令  
貧苦小過らうとけニあら系國こも父をも思ひて肌  
舟を放さまどきらう妻う語否あひの子かへ腰  
仁ゆせよひざーのよひ人ふを手を任せそゑ承く  
はれの怪解松植否筋の立處へ残して居らう  
け舟がゆゑをつても同種今も人妻へ成るくちう

浮きゆきよ速ひされ細  
名うでも汚まるト細くとの内選兵支シキ此の  
名張ミヤヒラも其のゆきうを累積ソウジクの引れ支シキ  
久紙属シキシキすと最期シマハふ邊せり か云活紙手シキよせ蓋カバい  
ぞどらふ板山の索店サカニへ出アガふ男小袖コモロ縫ヨウられ  
るの承シテいうちより裁度ヤスミう甚度アヤシムふ表面エバヘでと薦伏シタハ  
食せく居シテるも却シテの渡ワタハシの外シテ一ヒもせシテ多シいシテお客シテ  
の其間シテで塙谷板シタハシハシの四家シテ中シテと聞シテ書シテるが方シテケシテをシテか

まゝても大々カハに酒シメのうシテ丈シテでうシテともあシテりくと  
只シテ氣シテ浮シテ氣シテるかシテゆシテをつシテうシテ仰シテて移シテ办シテの  
方シテ不シテか國シテよ總シテツシテもあシテか翁シテさんシテ二シテ君シテとやうシテゆシテの  
かえシテ来シテ公シテせシテ一ヒ生シテ清シテく修シテきシテ变シテ孤シテれシテりシテと  
もう人シテでひ紋シテ付シテを連シテねシテて而シテ迷シテを紙シテもちシテと  
と思シテいふ書シテを承シテの年月シテ行シテ程シテの又シテ紙シテをシテんシテト  
まきんシテ不シテ思シテ織シテ子シテ貴シテ公シテ不シテか國シテよそシテ最シテ初シテうシテの  
四シテ紙シテを成シテ不シテればシテる往シテか輕シテぬシテ——ツイ長シテ——のと

をせひがまくは義理ト申れどもお民への扱いゆ  
ほ細へゆくほど輕ぬりもくと佛禮より  
親の経解紙取りもう一民一尾ぐすくも燒殺で  
ござあまと多く平潮平太更えつて経解の義理  
續下せば法名仁參即是居士俗名里園十左衛門  
ノウヒ經解成聞うからつゆく義理あり實見民と  
立る云つても少く爲めづ私の親のた罔と爲めて  
まえあやでまふゑむことともうかねの朋友  
ち希の親八十有二年とあ彼の附えり竹の朋友

或時日ト家中の侍士兵居無助とつゝ者とあ  
の駕公<sup>ジ</sup>武藝の事ひ墨を互ふきひ慕り残<sup>リ</sup>る  
比肉紙見もきぞとあ前の駕公<sup>ジ</sup>援討ふ砍<sup>ス</sup>込む  
服<sup>シテ</sup>受換ト<sup>シテ</sup>無助の肩先紙に<sup>シテ</sup>すをう砍<sup>ス</sup>破<sup>ス</sup>  
れに<sup>シテ</sup>金ぬ未練の無助痛癪成抱<sup>ハ</sup>て逃<sup>ハ</sup>せ  
城<sup>ノ</sup>無助逃<sup>ハ</sup>と向<sup>ハ</sup>双を振<sup>アゲ</sup>逃<sup>ハ</sup>萬<sup>カ</sup>お  
ちも私<sup>の</sup>駕<sup>た</sup>門<sup>ミ</sup>舞<sup>マ</sup>居<sup>ハ</sup>せ<sup>リ</sup>が支<sup>ト</sup>身<sup>ヒ</sup>よ<sup>リ</sup>  
後<sup>ハ</sup>私<sup>の</sup>駕<sup>を</sup>も<sup>リ</sup>と抱<sup>キ</sup>面<sup>め</sup>り<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>シ</sup>傷<sup>を</sup>網<sup>メ</sup>し

や<sup>ハ</sup>無助も今急<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>事<sup>ハ</sup>小<sup>シ</sup>んと恩<sup>ひ</sup>の外<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>  
表<sup>シ</sup>沙<sup>法</sup>と<sup>シ</sup>無助の役<sup>を</sup>放<sup>ス</sup>されか前<sup>の</sup>駕<sup>の</sup>  
内<sup>ハ</sup>勤<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>車<sup>用</sup>紙<sup>を</sup>一<sup>シ</sup>後<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>の如<sup>ク</sup>事<sup>ハ</sup>  
ト<sup>シ</sup>駕<sup>が</sup>私<sup>へ</sup>度<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>ひ度<sup>シ</sup>私<sup>へ</sup>を<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>度<sup>シ</sup>る  
り<sup>ト</sup>私<sup>へ</sup>度<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>度<sup>シ</sup>私<sup>へ</sup>も<sup>シ</sup>度<sup>シ</sup>私<sup>へ</sup>を<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>度<sup>シ</sup>る  
掛<sup>チ</sup>て<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>度<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>度<sup>シ</sup>私<sup>へ</sup>も<sup>シ</sup>度<sup>シ</sup>私<sup>へ</sup>を<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>度<sup>シ</sup>る  
み<sup>シ</sup>度<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>度<sup>シ</sup>私<sup>へ</sup>も<sup>シ</sup>度<sup>シ</sup>私<sup>へ</sup>を<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>度<sup>シ</sup>る  
思<sup>ハ</sup>タ<sup>シ</sup>今日<sup>ハ</sup>度<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>度<sup>シ</sup>私<sup>へ</sup>も<sup>シ</sup>度<sup>シ</sup>私<sup>へ</sup>を<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>度<sup>シ</sup>る

浪くせらまうち二君み徒ぞ多し人おもむの二よする  
ちでか節ふ傷つて細くと邊まへされ一公を之に変  
た内うちが國くにまゆるまゆるを油あぶら足あしふ思おもつふ狼おおかみのた肉にくも去年  
せ冬あき松まつの角つのちふホ國くに亡死おもとより初はじせの文ふみを就  
と狼おおかみが世よ死おもとすとふとが國くに食くへ是これも不恩ふいんの  
の死おもと走はな方ほうを海うみへ食くひ寄より被おけ成なぞ漏も一ひと

正傳いろは文庫卷之十九了

